

## 全学院教職員礼拝

### 新型コロナウイルス感染症と対峙しつつ

2020年4月22日

学院長 嶋田順好

聖書：コリントの信徒への手紙Ⅰ 第13章4節-7節

<sup>4</sup>愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。<sup>5</sup>礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。<sup>6</sup>不義を喜ばず、真実を喜ぶ。

<sup>7</sup>すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

新型コロナウイルス感染症(以下コロナと略記)のため、私たちは今、未曾有の試練のなかにあります。卒業式、入学式も例年の形では持つことができず、対面型の授業・講義もできないまま今日に至っています。本来なら共に礼拝を守り、32名の新入教職員の歓迎会を持つことになっておりましたが、そのことも断念せざるを得ないこととなりました。

日々刻々と事態が推移するなか、こども園、中高、大学では、この危機に際し各々の執行部はもとより、すべての先生方、職員の方々が、全力をあげて遠隔授業を始め、様々な事態に備えるべく奮闘して下さっておられることに心から敬意を表すものです。なによりも主の確かな導きと支えが、お一人お一人の上に豊かに注がれることを祈らずにはられません。

東日本大震災とそれに起因する福島第一原発事故は、現在に至るまでなお甚大な被害を多くの人々、地域にもたらし続けております。しかし、世界全体を例外なく一気に巻き込み、人間の命と健康、経済と文化を根底から脅かす災禍としては、このコロナ禍ほど深刻な災害はないと言っても過言ではありません。

それにしても昨年11月下旬から中国の武漢で始まったと言われるこの病が、3月にはイタリア、スペイン、ヨーロッパで爆発的感染を引き起こし、ひいてはパンデミック状態をもたらすに至るとは、一体だれが予想できたでしょうか。グローバル化された社会は、緊密、複雑、膨大なネットワークの集積で結びつけられ、ものすごい勢いで多くの人、物、情報が行き交っています。私たちはどうかそのプラス面にのみ関心を注ぎがちでしたが、この度のあつという間の感染拡大は、否応もなくその負の側面をも見せつけられる出来事となりました。

当初ヨーロッパ諸国は、アジアの一角で生起している感染症と高を括り、あたかも対岸の火事のように見ていた節があります。まさにその虚を突かれるようにして、感染拡大が深刻化したと言えるでしょう。もちろん、日本も例外ではなく、今回と同様のコロナウイルスが原因となった2002年の「重症急性呼吸器症候群(SARS)」や2012年の「中東呼吸器症候群(MERS)」の流行を免れていたこともあり、国や自治体の感染症対策は十分に整っておらず、検査体制、医療体制、経済支援など、さまざまな面で多くの綻びが出て、対策は後手後手に回ってしまいました。

新薬やワクチンの開発には早くても1年から1年半はかかり、それまではアビガンやレムデシビ

ルなど有効と思われる既存薬を用いて治療に取り組まなければなりません。たとい新薬やワクチンが開発されたとしても、それが世界中の人々、ことに途上国のより困難な状況にある人々まで行き渡るようになるには数年単位の時が必要となるでしょう。また、ウイルス自身が変異を遂げるため完全な終息は難しく、今後も第二、第三のパンデミックを警戒しつつ、このウイルスと辛抱強く忍耐をもって闘っていかなければなりません。

確かなことは、新薬とワクチンが開発され、この感染症がほぼ無力化(現状ではこのことも希望的観測にすぎませんが)される数年先までは、これまでの生活様式に戻ることはできないという単純な事実です。つまり、もはや自由に人と出会い、気軽に仲間と食卓を囲み、口角泡を飛ばしながら大いに語り合うことはできなくなってしまったのです。これからは常に密閉、密接、密集を避け、換気に配慮し、マスクを着用し、こまめに手を洗い、社会的距離を保ちながら生活を続けなければなりません。そのことを常に心がけ、励行することは容易なことではなく、大いなる自制と忍耐が求められます。

しかし果たして私たちはこの厳しい状況を甘受し、忍耐することができるのでしょうか。「忍耐」ということで、私が思い起こす一人の人物がおります。動物行動学者で「攻撃」や「刷り込み」という動物の習性を研究したノーベル賞学者のコンラート・ローレンツです。彼は『文明化した人間の八つの大罪』という本の中で、現代の科学技術の驚くべき進歩と発展が、人類にかつてない、快適で、便利な状況をもたらしたが、反面そういう便利さ、快適さが精神的にも、肉体的にも私達の生物としての耐える力を弱める側面を持っていることを忘れてはならないと警告するのです。要するに私たち現代人は、知らず知らずのうちに、皆、温室育ち、籠の鳥になってはいないかということでしょう。その中で、私達は次第に忍耐する力を喪失し、自分勝手に我がままな人間になってしまっているのです。

そのことを思いめぐらすにつけ、私の脳裏に浮かんでくるのは、使徒パウロがコリントの信徒への手紙Ⅰ第13章4節-7節で記した次のような言葉です。

「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」

ここで使徒パウロは畳み掛けるように短い文章の中で15もの動詞(ギリシア語原文)を用いて神から来る愛のいろいろな面について浮き彫りにしています。そのなかに多くの「忍耐」に関連する言葉が出てくることに気づかされます。冒頭の「愛は忍耐強い」に始まり、終わりの方には「すべてを忍び」、「全てに耐える」とあります。また「苛立たない」、「恨みを抱かない」という動詞も、愛に生きている者が、厳しく辛い状況のなかにあっても、じっと耐えている姿をさしていると言えるでしょう。

ことに私が心惹かれるのは、「すべてを忍び」、「すべてに耐える」に挟まれるようにして「すべてを信じ、すべてを望み」と告げられているところです。人はなぜ忍び、耐えることができるのでしょうか。それは信じ得るものがあり、望み得るものがあるからではないでしょうか。それならその信じ得るもの、その望み得るものとは何なのでしょう。パウロにしてみれば、信じ得るものとは明らかに私たちの罪の身代わりとなって十字架にかかられた主イエスの愛であり、望み得るものとは、その死と滅びの力に勝利された主イエスの復活の命にほかなりません。このキリストの十字架と復活

のゆえに、どんなに状況が自分の思うようにならない時にも苛立たず、恨みを抱かず、耐え忍ぶことができるというのです。そのことをコロナ禍のなかにあつて、私たち自身も深く心に留めたいと願うものです。

それにしてもあらためて冷静に考えてみれば、「人格の完成」をめざすリベラルアーツ教育を実践するためには、三密は必要不可欠なことではないでしょうか。皆さん自身の中学、高校、大学時代のことを思い起こしてみても、授業やゼミでの学びはもちろんのこと、休み時間の友人との交流、部活、体育祭、文化祭、合唱祭、修学旅行等、深く印象に残る光景は、すべて三密に関わる出来事ばかりではないでしょうか。更にミッション・スクールとしての宮城学院にとって「建学の精神」と「スクール・モットー」で謳われている「神を畏れ、隣人を愛する」教育を貫くために礼拝は不可欠なものです。しかし、それもまた「三密」の場にほかなりません。

つまり私たちに突き付けられた課題とは、「コロナ禍を防ぐためには三密を避けなければならない。しかし、より良いキリスト教的な人格教育を全うするためには三密は不可欠である」という矛盾した命題です。それをいかに止揚し、克服するのかということにほかなりません。極めて重大且つ解決困難な課題だけに、宮城学院に連なる教職員が思いと心を一つにしてこの時代からの挑戦を真正面から受けとめ、ただ愛をもって創意工夫を凝らしつつ、園児、生徒、学生、院生のために、よりよい教育の形を生み出すべく、惜しみなく努力することが求められているのです。

「宮城学院報」にも書かせていただきましたが、末光学長のご手配で4月14日に東北大学データ駆動科学・AI教育研究センター長早川美德教授を講師とする「オンライン授業の留意点」という講演と質疑応答が、ZOOMによる遠隔講義形式で持たれました。告知期間が短かったにもかかわらず、実に176名もの教職員の方々が参加されたことから、コロナ禍を克服するための皆さんのなみなみならぬ志を感じさせられたことです。

ZOOMを用いるのは私自身も初めての経験でしたが、発言者の顔が画面一杯に映し出され、対面授業の時以上に教員が受講者と「顔と顔とを合わせる」ことができる可能性があることに新鮮な驚きを覚えさせられました。また、これまでの私の経験では、講義の途中で「何か質問はありますか」と問いかけても、挙手して質問をする学生は滅多に出てきませんでした。しかしながらZOOMには(多分同様のソフトにも)チャットで自由に質問を発する機能がついています。このことは「書いて質問する」ことに関してはそれほど抵抗感のない学生たちと、より豊かな双方向性の学びを共有することができるメリットがあると思われたことです。たった1時間ほどの入門的な研修でも、遠隔授業の新たな可能性を知らされたことは幸いでした。これ以外にもZOOMならではの効果的なプレゼンテーション機能が設定されていることでしょう。それらを駆使すれば、コンテンツによっては対面授業にも勝る授業も展開可能となるとの思いを強くさせられたことです。

コロナ禍が一定の収束を見るまでは、感染の度合いによって出校できる期間とできない期間とを繰り返しながら授業を展開せざるを得なくなると考えられます。となれば遠隔授業に委ねられる部分と対面授業でなければならない部分を的確に識別し、その両者がハイブリッドされることにより総合的に見れば、これまで以上の学びの質と教育効果が保持されるカリキュラム展開をすることが求められるということではないでしょうか。もちろん、「ローマは一日してならず」、一朝一夕で開ける道ではありません。しかし危機を好機に変え、倦まず弛まず、より高い教育目標の達成を目指し、園児、生徒、学生、院生たちが、宮城学院で学べたことを心から喜べる教育環境を形作っ

ていくことが、今の私たちには求められていると言えるでしょう。

そのことを実現するためにも、まずは使徒パウロのローマの信徒への手紙第 5 章 3 節-5 節と 20 世紀を代表するアメリカの神学者で政治思想家でもあったラインホルド・ニーバーの祈りを心に刻みたいと思います。

そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。

ローマの信徒への手紙第 5 章 3 節-5 節

神よ、変えられないことについては受け入れるだけの冷静さを我らに与えたまえ。

変えられることについては変えるだけの勇気を与えたまえ。

そして変えられないことと変えられることを識別する智慧を与えたまえ。

ラインホルド・ニーバーの祈り

祈祷

恵みと慈しみに富みたもう主イエス・キリストの父なる御神。

あなたの御名を崇めます。2020 年度は、コロナ禍のゆえにまことに厳しい試練のなかからのスタートとなりました。どうか私たちがこの試練のときにキリストの十字架に至るまでの愛と、罪と死と滅びの力に勝利された復活の命の希望に力を得、思うにまかせない状況に苛立つことなく良く忍耐し、なによりも園児、生徒、学生、院生たちのためになくはならない教育を、愛と智慧をもって全うしていくことができるよう導いてください。

今年度新たに力ある 32 名の新入教職員の方々を宮城学院に迎えることができた幸いを感謝し、そのお一人お一人の上に、あなたからの祝福と恵みを豊かに注いでください。また、すでに宮城学院に連なっている者たちも思いを新たに、新しく加えられた方々と共に、「神を畏れ、隣人を愛する」人格を育むための教育的使命を全うしていくことを得させてください。私たちは信じます。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。それゆえ冷静さと勇気と識別する智慧をもってこの試練をよく克服することができるよう導いてください。

なによりも新型コロナウイルス感染症にかかり、苦しみのなかにある方々をあなたが癒し、最前線で戦う医療従事者の健康を守り、経済的な苦境のなかにある方々を支え、為政者たちが愛において今この時必要な政策を正しく打ち出せるように導いてください。また、宮城学院に連なるすべての者とその家庭の歩みが、あなたの確かなみ腕のもとにあり、新型コロナウイルス感染症から守られ、一同が健やかに力強く歩みゆくことができるよう支えてください。

この祈りを宮城学院のまことの創立者である主イエス・キリストの御名を通して御前にお捧げいたします。アーメン